

「糖尿病」の名称 をめぐる



帯広市医師会
こしや糖尿病・内科クリニック

こしや
越谷

たけし
剛

「糖尿病」の名称をめくり、世間が多少ざわついております。その名称が差別、偏見を助長しているという背景のもと、日本糖尿病協会、日本糖尿病学会が中心となり2023年9月に「ダイアベティス」への変更を検討する方針となりました。ネットなどでは賛否両論あるようです。

糖尿病を表す用語として古くからチャイナ由来の「消渴」という用語が用いられ、オランダ医学が輸入された江戸時代中期以降、オランダ語病名の漢訳化がなされました。「適塾」で有名な緒方洪庵が19世紀半ばに「尿崩」という訳語をあてたことに始まり、以後種々の病名が示されるなか明治時代末期の日本内科学会において「糖尿病」に名称を統一され、現在に至っております。なお「尿崩」の字は、現在尿崩症という疾患があることから推測可能ですが、当時から糖尿病の病態に合う日本語の病名がなかったことがうかがえます。

福満らは、1991年の日本糖尿病学会誌においてアンケート結果をもとに私案を示したうえで、「糖尿病」の名称は明治以来の歴史的背景を持ち、社会に長年にわたり定着しているものであり、名称の検討には相応の必然性、医学的、一般社会的合意を要すると述べております。また垂井は、1994年の『最新医学』において、糖尿病の「尿」の字の存在を、特に小児糖尿病患者さんが好ましく思わないという話を挙げ、その名にまつわる雰囲気感性を逆なでするところがあるのではないかと述べております。そして、「糖尿病」の名称の代案として「ディアベティス」とそのままの名称を普及させるよりないのではと書かれております。なお、先述のエッセイは『糖尿病物語』という書籍に纏められ2009年に出版されております。

19世紀の文豪マーク＝トウェインは「歴史は繰り返さないが、韻を踏む」という言葉を残しております。歴史は、同じような出来事が時期や登場人物を変えて韻を踏むように繰り返されるという意味だったと記憶しております。今回の名称変更の話も、歴史をさかのぼると、世相は異なるとはいえ同様のことが繰り返されているようにも見えます。

この話が始始めてから、コロナウイルスやインフルエンザワクチンの問診票の持病欄に、患者さんの書く、「糖尿」や「とうよう」という文字を見るたび複雑な気持ちになるのは自分だけでしょうか・・・。

てっぽうのはなし



上川北部医師会
北海道名寄保健所

さい
斎

とう
藤

たい
泰

いち
一

小さい頃からなぜか銃が好きだった。子供心に「いつか本物を撃てみたい」と思っていた。大人になってグアム島に行ったときに、生まれて初めて本物の銃を撃った。

ワールドガンというこの世界では有名な専門店で、世界中の銃が所狭しと並んでいる。その中から撃ちたい銃を選び、お店のスタッフの運転する車で山奥の屋外射撃場に連れて行ってもらい、撃った。しかしその前に、やってはいけないことを学ぶ必要がある。

銃を持ったら標的に銃口を構えて向けるまで絶対に引き金に指をかけないこと。銃を人に向けないこと。銃を持ったら自分の左右に向けないこと。銃口をのぞき込まないこと。不発だったら10秒数えるまで標的に銃口を向け続けること。これは遅発といって不発弾が数秒たってから突然発射されることがあるから。すべて自分や他人の命に直接関わることで、しっかり覚えなければならない。

そのときは拳銃、半自動ライフル、突撃銃などで300発ぐらい撃った。口径の小さい拳銃は反動もごく小さいが、38口径（9mm）や45口径（11.4mm）の軍用拳銃はぐわんと手首を上にはねり上げるような強い反動がくる。突撃銃は、よく映画でゲリラなどが持っているAK47という旧ソ連製のものと米軍のM16というのを撃った。AK47は反動がきついでだけでなく、ハンドガードという木でできた左手で握る部分が20発も撃つともものすごく熱くなるのが発見であった。M16は軽くて、反動は鋭いが少なく、AK47よりずっと撃ちやすかった。が、撃つ度にスプリングの「ピョヨヨン」という安っぽい音がするのが意外だった。

グアム島にはその後2回行き、そのたびにワールドガンのお世話になった。

一番強烈な印象があったのは、旧日本軍の三八式歩兵銃だった。とにかく長い。そして、そんなに重くはないのだが、長いせいでモーメントの関係で振り回すのに難儀する。そして、反動がとてもの少なくて撃ちやすい。なのでよく当たる。でも、これを持たされて「あの丘を占領せよ」と命令されても長いし振り回しにくいしさぞかし大変だろうな、と思った。

結局3回のグアム旅行で合計1,000発ほど撃ったのだが、その後急に銃への関心が激減してしまった。満足したのだと思う。そして、本物の銃を撃つての結論は、一般人が銃を持つのに非常に厳しい規制のある日本で本当によかった、ということだった。これは今も心の底からそう思っている。